

一関地域におけるイネドロオイムシの広域発生要因と対策

- 1 平成 29、30 年において、一関地域でイネドロオイムシが広く発生した要因は以下のとおりである。
 - (1) 地域の個体密度が高かった
 - (2) 6月が低温で経過したことによりイネドロオイムシの産卵加害期間が長引いた
- 2 イネドロオイムシの発生が広くみられた地域では、地域内の個体密度を下げ、次年度は本虫に卓効を示すジアミド系殺虫剤を含む箱施用剤を用いて地域一斉防除する。

1 背景

水稲初期害虫の育苗箱施用殺虫剤による防除は、県内において実施率 76%（平成 30 年度市町村防除実績）と広域で行われており、近年のイネドロオイムシの発生は少なく推移している。

しかし、平成 29、30 年において、一関地域でイネドロオイムシが広域で発生し、県南部における加害盛期（6月中旬）を過ぎた7月上旬調査において被害程度が高い圃場が広くみられたため、その要因を明らかにした。

2 イネドロオイムシの発生状況及び要因

- (1) イネドロオイムシの発生圃場率は、県全体では低く推移しているが、一関地域は他地域と比べ、広く発生がみられている（図1）。
- (2) 本地域では、平成 28 年にはイネドロオイムシの発生程度は低いものの広域で確認されていたことから、本虫は広く発生していたと考えられる（図1）。
- (3) 平成 29、30 年は、産卵盛期（推定）後の6月が平年より低温で経過し、イネドロオイムシの産卵加害期間が長引いたため、被害程度が高くなった（図2）。

3 当面の防除対策

- (1) 平成 30 年において、一関地域で育苗箱施用剤としてジアミド系殺虫剤を使用した圃場では、本虫による被害はみられず、ジアミド系殺虫剤は本虫に対して極めて効果が高いと考えられる（図3）。
- (2) イネドロオイムシの発生が広くみられた地域では、地域内の個体密度を下げるため、次年度は本虫に卓効を示すジアミド系殺虫剤を含む箱施用剤で地域一斉防除する。
- (3) 育苗箱施用剤は規定量を施用すること。

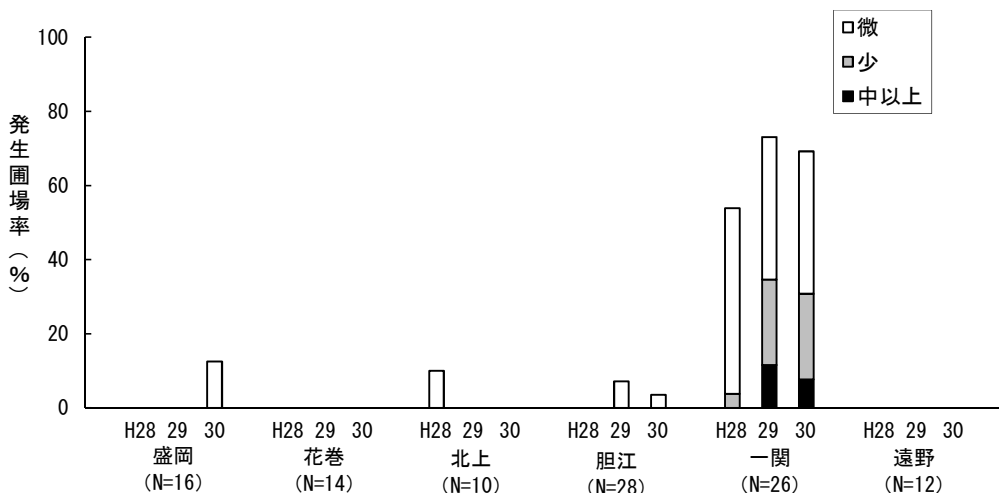


図1 イネドロオイムシの地域別発生圃場率の年次推移 (7月上旬、被害度)

※育苗箱施用剤としてジアミド系殺虫剤を使用した地域：盛岡、花巻、北上、胆江、遠野
// ネオニコチノイド系殺虫剤を使用した地域：一関

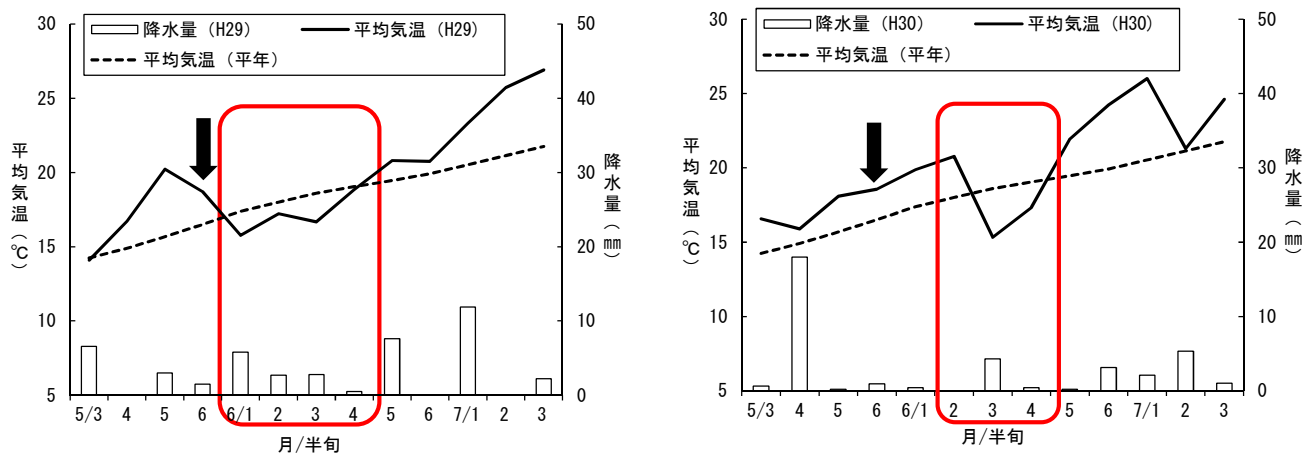
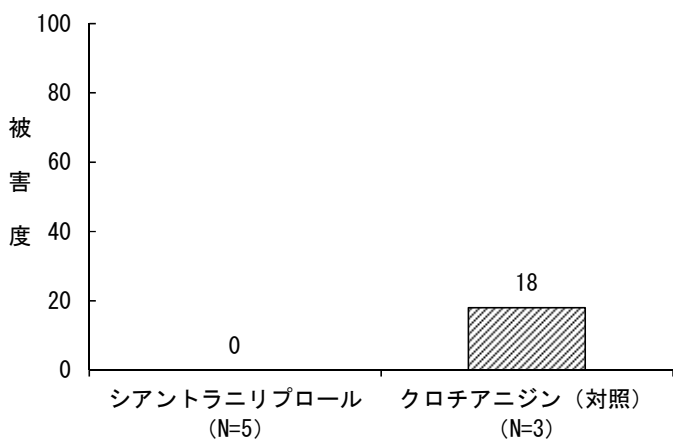


図2 一関市における5～7月の気象経過（左：平成29年、右：平成30年）
 ※黒矢印は有効積算温度に基づくイネドロオイムシの産卵盛期

(摘要)

H29、30は、6月（赤枠）が平年より低温で経過し、イネドロオイムシの産卵加害期間が長引いたと推察される。



○耕種概要等

- ・調査地 一関市萩荘
- ・品種 ひとめぼれ
- ・移植日（処理日） 5月10日～5月12日
- ・供試薬剤 シアントラニプロロール剤（5筆）
クロチアニジン剤（3筆）

○調査方法

7月2日に1圃場あたり25株について、食害程度別に調査し被害度を求めた。

（発生程度別基準）

発生程度	無	微	少	中	多	甚
被害度	0	1～10	11～20	21～40	41～70	71以上

図3 イネドロオイムシに対する各種薬剤の防除効果（平成30年）

(摘要)

- ・対照薬剤（クロチアニジン剤）の発生程度は「少」（発生程度別基準による評価）。
- ・シアントラニプロロール剤（ジアミド系）は、対照薬剤（クロチアニジン剤）に比べて卓効を示した。